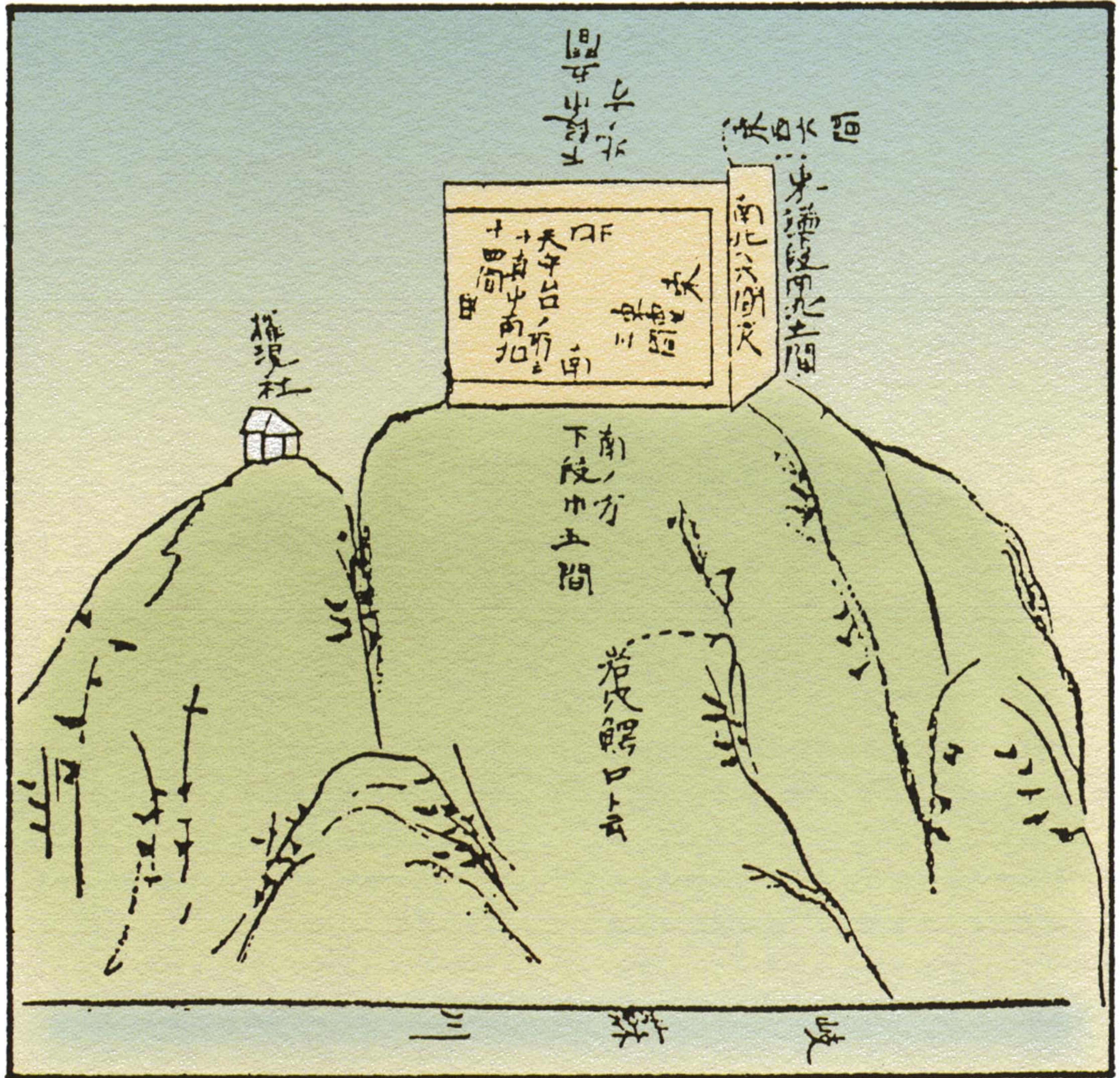




# 伊木山城跡

編集 各務原市埋蔵文化財調査センター  
 発行 各務原市教育委員会  
 TEL (0583) 83-1123  
 平成15年3月20日



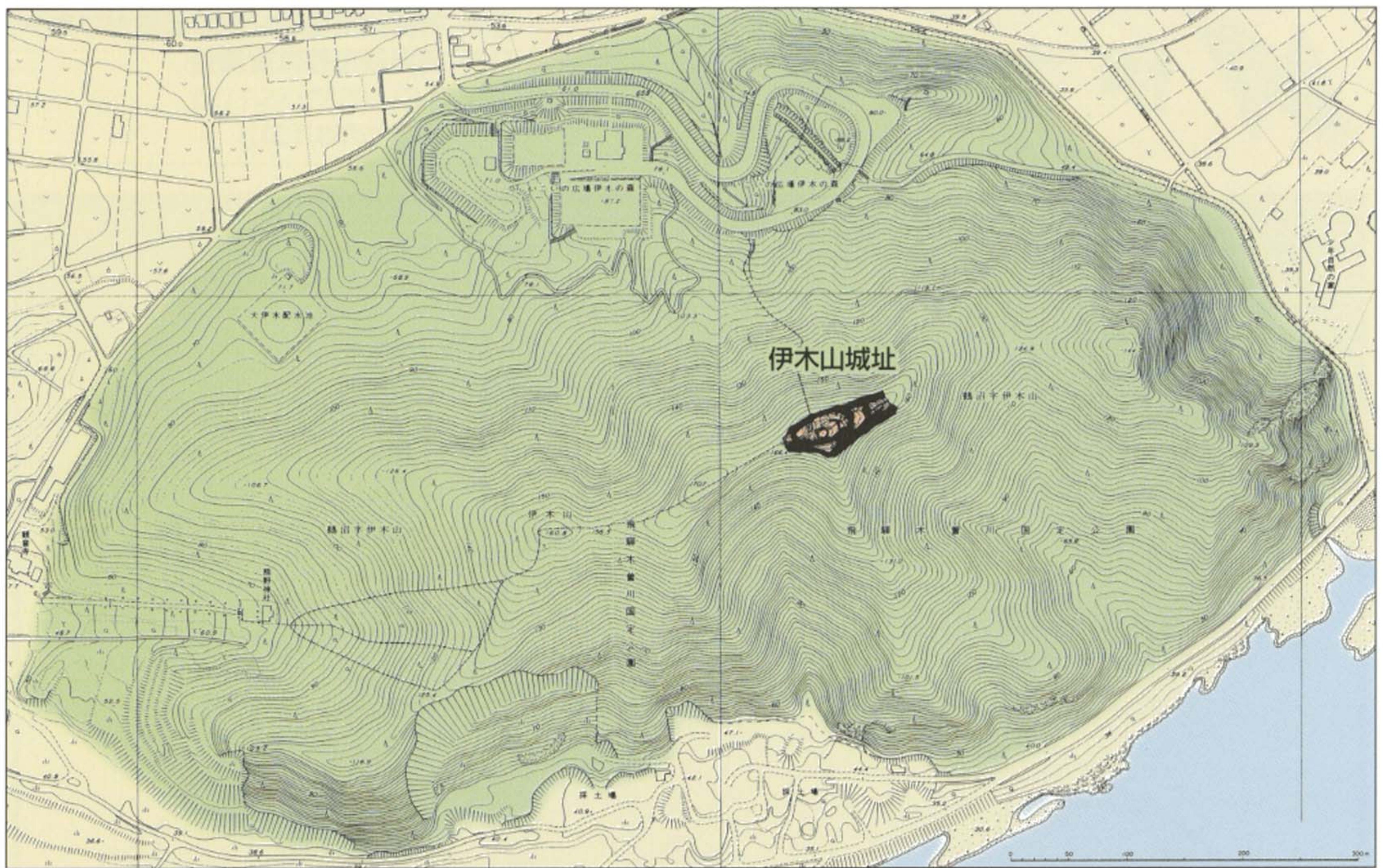
伊木山城址絵図(『美濃雑事紀』より)

## 伊木山城の歴史的背景

伊木山城は、各務原市鷺沼の木曾川北岸にそびえる伊木山山頂(標高173.1m)に築かれた戦国時代の城塞です。江戸時代に書かれた『美濃雑事紀』という書物には、江戸時代の伊木山城跡の様子について、「東の方天守台まで五段あり。天守台東西六間(10.90m)、南北四間三尺(8.18m)石垣台形今に存す。南の方は山なだれて麓に木曾川流る。北の方一面に切岸高く、岩石累々た

り。麓に小山あり、辺りに鞠ヶ野と言うあり。諸士の宅址、古井あり、土居形存在す。」と記されています。また、同じく江戸時代の『美濃国諸旧記』という書物には、伊木山城は永禄3年(1560)に織田信長によって攻め落とされ、天正19年(1591)に廃城になったと記されています。さらに、織田信長の家臣であった太田牛一が記した『信長公記』という書物には、織田信長が永禄8年





伊木山城址位置図

(1565)の頃とされる美濃進攻作戦で、伊木山に城を築いて陣所としたことが記されています。

こうしたいくつかの古記録によれば、伊木山城が美濃と尾張における木曾川渡河地点の軍事的要衝として重視され、織田信長の美濃攻略ではその前進基地となっていたことがわかります。

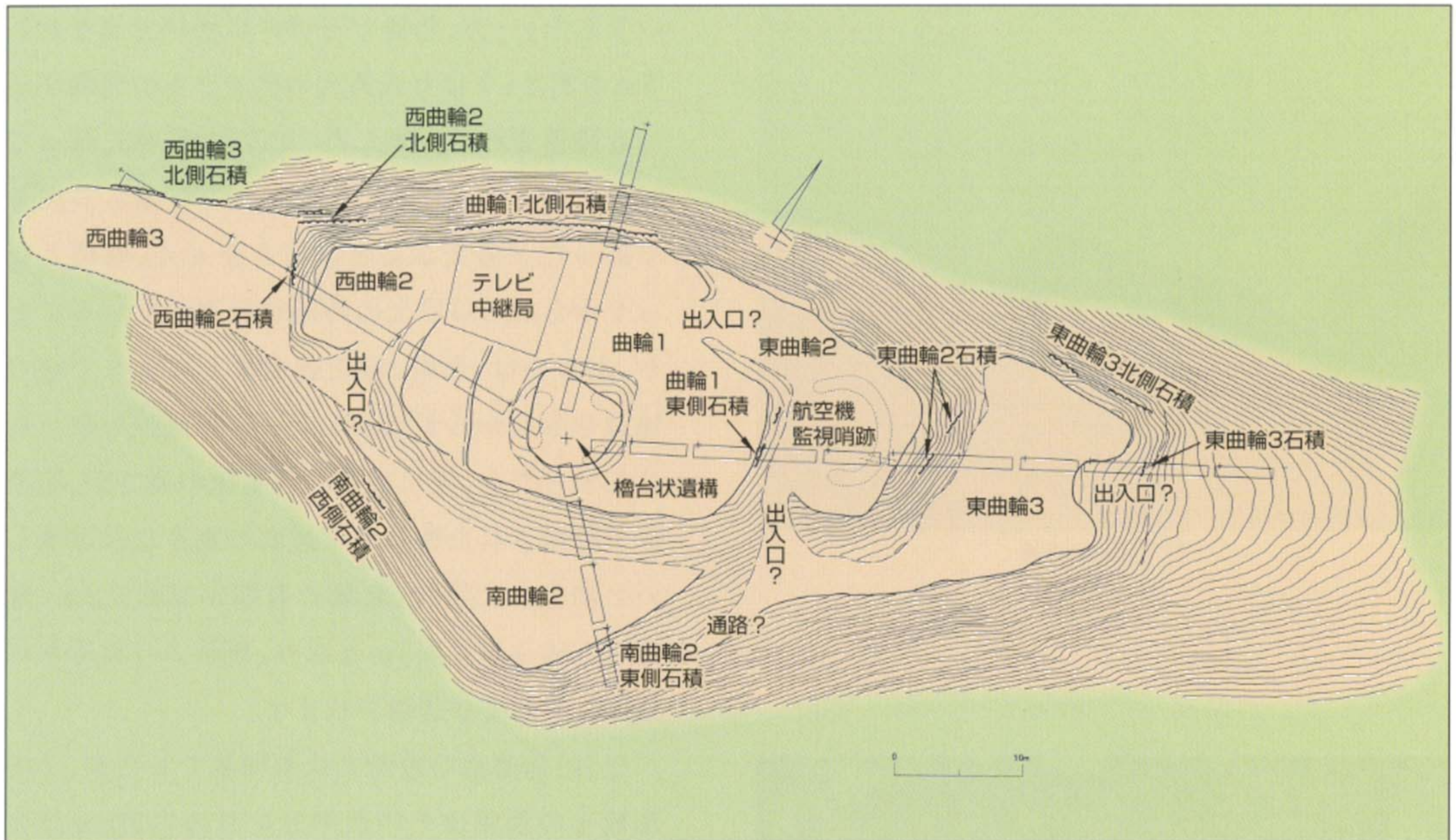
その間の詳しい経過は不明ですが、当時、伊木山城には、織田信長の家臣で池田恒興配下の伊木清兵衛忠次(1543～1603)という武将が在城していたとされています。この人物は、「伊木」という姓からすると、古くから伊木山城に関わりのある人物だったのではないかと考えられますが、確実な記録が残っていないためによくわかりません。記録によれば、伊木氏は、天正13年(1583)に羽柴秀吉から美濃竹ヶ鼻辺り(岐阜県羽島市)で領地を得ており、さらに天正17年(1589)にはあらためて5千石の知

行を認められています。ただし、そのなかに伊木山周辺の鶴沼の地名がみられないことから、もともと伊木山城の主だったとしても、天正13～17年の間には伊木山城を離れたことが推察されます。

その後の伊木氏は、天正18年(1590)に池田氏が三河吉田城(愛知県豊橋市)に移るのに従って美濃の地を離れ、さらに慶長5年(1600)、関が原の戦いののち池田氏が播磨国姫路城(兵庫県姫路市)に移ると、3万7千石を与えられて播磨三木城主となっています。

このように伊木山城は、伊木氏が池田氏に従って三河に移り美濃を離れた頃には、戦国時代の城塞としての役割を終えて廃城になったと考えられます。





伊木山城址測量図

## 発掘調査前の城跡の状況

伊木山は山頂の尾根が東西にのびる岩山です。山の南麓にはやや傾斜がゆるやかな部分もみられますが、北側は傾斜が急で岩肌が露出しています。また、所々に自然の侵食による深い谷が刻まれて山の険しさを増しています。

城跡は、山頂の最高所に城の中心となる主郭部分(曲輪1とよびます)が存在し、さらにその中央には一辺約8mの檜台状遺構やぐらだいじょういこうがあって、『美濃雑事紀』にいう天守台であろうと考えられます。そして、曲輪1の東側と西側には、それぞれ2段目に相当する曲輪があり、さらにその東西に3段目の曲輪があります。一方、曲輪1の北側は岩盤が直接露出した急斜面ですが、南側はややゆるやかで曲輪が一段配されています。こうした曲輪の斜面には、人工的な石積みと考えられる石垣状の列石も所々に認められます。

## 発掘調査の目的と方法

平成12年8月から11月にかけて、伊木山城跡の遺構の範囲や規模、性格などを把握するため

の発掘調査が行なわれました。その結果、伊木山城跡は現況どおり、山頂の曲輪1を中心として東側に2段、西側に2段、そして南側に1段の曲輪を配していたことが確認されました。城跡全体の規模は東西90m、南北最大幅35mです。

## 曲輪1

城の中心となる曲輪1は、東西26m、南北21mの広さです。中央南寄りには一辺が約8mの檜台状遺構が存在します。

曲輪1は、曲輪の北側が自然の傾斜で深く落ち込む地形となっているため、その北縁部では厚さ約1.3mまで人工的な盛り土が認められました。

伊木山山頂の尾根筋は東西に細長く伸びて南北に平坦部分が少ないため、要所でこうした盛り土による曲輪の拡張工事が行なわれています。

曲輪の石積みは曲輪の東側と北側で確認されました。東側の石積みは現状で高さ約50cmあり、人頭大のチャートの角礫かくれきが3段に積まれて





伊木山城跡遠景

いました。一方、北側の石積みは現状で高さ約1.5mを測り、やはり人頭大のチャートの角礫が5～6段積みまわれていました。ところで、今に残っている石積みの高さが、もともとの石積みの高さであったと考えることはできません。廃城となってから400年以上の時間が経過していることや、あるいは、当時、城を放棄するに際して城の施設を少なからず破壊している可能性も考えられるからです。仮に石積みの本来の高さが、石積みで護岸された曲輪の平坦面の高さにはほぼ等しいと想定した場合、北側の石積みは約1.2m、北側の石積みは約2.3mとなり、現状よりはるかに強固な城の姿が想像されます。



曲輪1 東部からみた檜台状遺構

なお、発掘前の段階では不明確でしたが、この曲輪1の西側はその西半分をさらに30cmほど浅く掘り下げて平坦面を造成していることが判明しました。ここには焼土と炭化物が集中する地点があり、それに接して、天目茶碗と川原石が1個出土しています。

### 檜台状遺構

曲輪1の中央やや南寄りにある方形の土壇です。一辺が約8mの規模で、現状の高さが約60cmあります。全体が盛り土によって造られており、その土中からは焼土と炭化物に混じって「かわらけ」、あるいは「羽釜」とよばれる素焼きの土師質土器の破片が多数出土しました。



曲輪1 北側の石積み

遺構の盛り土の中から遺物が出土したことは、その遺物が遺構の構築時かそれ以前に混入したものであることを示しています。そして、その遺物が、祭祀に用いられることが多い土師質土器であることと、火を焚いた痕跡である焼土の存在から、ここで何らかの祭祀が行なわれたのではないかと考えられます。その性格は不明ですが、いずれにしても檜台状遺構が城の中心部に位置する施設であることから、伊木山城の築城に関わるものであった可能性が高いと考えられます。





曲輪1 東側の石積み



天目茶碗出土状況



檜台状遺構の断面

## 東曲輪2

曲輪1の東側には、現状で約50cmの段差をもって東西9m、南北13mの2段目の曲輪(東曲輪2とよびます)があります。その中央部分は円形に窪んでおり、東側にはほぼ半円形に土塁状の高まりがめぐっています。土塁を含めた遺構全体の規模は東西約9m、南北約13mです。おそらく、曲輪の平坦部を皿状に掘り窪めて、その周囲に廃土を土塁状に盛り上げたものと考えられます。

正確な位置は確認されていませんが、太平洋戦争の時に伊木山には航空機監視哨が置かれていたとされていますので、この窪みと土塁状の高まりがその跡ではないかと考えられます。

東曲輪2の東斜面には、東曲輪3との間に現存の高さで約60cmの石積みが見られます。残りは良くないのですが、角礫が2段に積まれていました。しかし、前述のようにもともとの石積みの規模を考えますと約1.6mの高さが想定され、さらに石積みの基底は、岩盤を削り出した高さ約1.3mの傾斜面に載っていますので、全体としては高さ約2.9mという大規模な姿になります。

## 東曲輪3

曲輪2の東側に東西9m、南北17mの3段目の曲輪(東曲輪3とよびます)があります。

東曲輪3は、曲輪の東側傾斜面が中央で大きく窪んでいることから、城への出入り口が設けられていたのではないかと考えられますが、後世の山道の可能性もあります。一方、東曲輪3の南西部は現状では徐々に降って、南曲輪2の下方で消滅していますが、もともとは山の南麓を降って木曾川河畔に通ずる道だった可能性があります。

曲輪の東側と北側には石積みが見られます。東側の石積みは残りが良くないのですが、現状





東曲輪 2 の状況



東曲輪 2 東側の石積み



東曲輪 3 の状況

で約50cmの高さがあります。しかし、本来の高さとしては、曲輪平坦面の高さから約1.8mほどであった可能性があります。

## 南曲輪 2

曲輪 1 の南側には、約1.7mの段差で東西約30m、南北約10mの三角形を呈する曲輪がみられます(南曲輪 2 とよびます)。この曲輪は、山の北側に比べて南側が張り出すような地形となっているため、城の中心部の<sup>ほうぎょせい</sup>防御性を高めるために配されたものと考えられます。石積みは曲輪の東斜面と西斜面にあり、東斜面では現状で高さ約60cmありましたが、曲輪平坦面の高さからすれば、本来約2.4mの高さがあったと考えられます。

ところで、曲輪の北側にあたる曲輪 1 の南傾斜面では石積みの存在は確認されませんでした。現状で約1.7mの高低差があるのですが、そこに石積みがない理由としては、この部分が盛り土による傾斜面ではなく、自然の地山を削り出した強固な壁面であることが考えられます。

## 西曲輪 2

曲輪 1 の西側に、約30cmの低い段差で東西7m、南北8mの2段目の曲輪(西曲輪 2 とよびます)があります。曲輪 1 との段差には、石積みの基底部と考えられる角礫が3個検出されましたが、遺存状態が悪く本来の規模や形状を推測することはできません。しかし、曲輪 1 の平坦面の高さを参考にすれば、曲輪 1 の東側石積みと同様、高さ1m前後の規模が想定されるでしょう。

曲輪の西斜面と北斜面にも石積みが見られます。西側の石積みは遺存状況が悪く基底部の1段のみが残っていました。しかし、発掘した土層断面をみると、自然の岩盤の上層はほとんどが人工的な盛り土であり、ここでも曲輪の平坦面を造成する際に、大規模な盛り土工事が行な





南曲輪 2 の状況



西曲輪 2 西側の盛り土部分



南曲輪 2 の川原石出土状況



南曲輪 2 の石積み

われていたことが判明しました。また、盛り土には、石積みの裏込めに相当すると考えられる、ほとんど土を含まない、角礫だけの部分が石積みに接して認められます。石積みの構築方法を知るよい手掛かりとなるでしょう。

石積みの元の高さは、曲輪の平坦面の高さを参考にすれば約 1 m と考えられます。しかし、石積みの基底部は、東曲輪 2 の東斜面と同様に自然の岩盤を削り出した斜面に載っていることから、本来の傾斜面の高さはその岩盤の高さを加えた約 1.4 m と推定されます。

### 西曲輪 3

西曲輪 2 の西側に、約 1.4 m の段差で細長い平坦面(西曲輪 3 とよびます)が延びています。長さ約 21 m、東部最大幅 11 m、西部幅約 6 m です。北側斜面には、高さ約 60 cm 東西約 21 m にわたって石積みが見られます。そして、これより西方は幅 2 ~ 3 m の細い尾根が西に延びて、山の南側と北側は削ぎ落としたような急傾斜面になっています。ところで、北側石積みが途切れる部分やその周辺には、地形の段差や溝状の窪みなど、城の防御施設と思われる痕跡が認められないことから、この西曲輪 3 が実際に曲輪だったのかどうか明らかではありません。しかし、北側の石積みが、曲輪 1 の北側平坦面同様、



曲輪の拡張工事によるものであることは明らかですから、ここが城の何らかの施設だった可能性は高いと考えられます。

### 伊木山城跡の年代

伊木山城の年代については、天目茶碗と端反<sup>はざり</sup>皿が古記録にみえる伊木山城の存城時期を考える資料として重要です。その年代は16世紀前半(1500～1550)ですが、しかし、やきものは条件さえ良ければ長期間使用されますので、16世紀後半(1550～1600)まで下ることも考えられます。記録にみられる伊木山城の活動時期にほぼ合致するといえるでしょう。



曲輪1 西側出土天目茶碗



東曲輪2 出土端反皿



西曲輪3 北側の石積み



櫓台状遺構出土土師質土器



曲輪1 北側の盛り土



伊木山城跡出土川原石(つぶて石?)